

素顔のまま



円山 愛祐

午後の7時を過ぎて、陽はすっかり小高い山々の稜線の陰に沈んでいた。
そのせいで、辺りはもうすっかり夕闇に包まれていた。

「おじさーん。 そろそろご飯ですよー。」香織のインターホンで呼びかける声に、獣医の鮫島は棟続きの診察室から戻ってきた。

「おー 腹減った。香織ちゃんいつもすまないねー」

「やだなー おじさん。いつになっても、そんな他人行儀なこと言って。」

「ははははは、すまん すまん。」

と、その時、車のクラクションの太い音が、立て続けに、二度鳴った。
香織は、急いでガスの火を消すと、窓のスクリーンを少しずらして、外の様子を確かめた。

「あら？ おじさん、徳兵衛おじいさんみたい。」香織は鮫島にそう言うと、急いで玄関に向かった。

香織が外に出ると、

「お〜っ 香織ちゃん こんにちはー じんべいさんは、いたかい？」

そう言いながら、穏やかな表情で徳兵衛がトラックの高い運転席から降りてくるところだった。

そこへ、鮫島も外に出てきた。
鮫島を見ると、徳兵衛は、ホッと安心したような表情で、近寄り、

「じんべいさんに、お客さんだよー・・・。」と言って親指で後ろを指す仕草をした。

鮫島は、その指で指された方向を見て、思わず声を上げた。

「あれっ・・・ もしかして・・・、し、翔子さんじゃないですかー。」

トラックのヘッドライトの光の中に立っているのは、間違いなく翔子だった。

翔子は、笑顔の中にも少し困惑したような表情を見せて、鮫島に向かって頭を下げた。

「いやー ビックリしましたー。」

「あーいがった、いがった。じんべいさんがいなかったらどうすっかと思ってさあ。山から降りてきたら、富岡の二股のところで、このお嬢さんに会ってさ、こんなとこでどうしたのさって聞いたら・・・、クローバーファームの隣の獣医さんの家探してるって言うべさー、あーそれじゃあ、じんべいさんとこだべえと言って乗せてきたのさー。

この辺じゃあ、隣の家たって2キロも3キロも離れているっしょ。 こーのお嬢さん、可哀想

一に、バス降りてからこの家を探して・・・、何時間も歩いてたんだとさー・・・。 いやー ゆるぐなだったと思うよー・・・。」

「徳兵衛おじいさん、ちょっと待っててー」

そう言って、香織はいったん家の中に戻ると、紙袋を下げてすぐに引き返して来た。

「徳兵衛おじいさん。はいこれっ。」

徳兵衛は、紙袋を受け取り中を覗き込むと、直ぐに嬉しそうに頬を緩めた。

「これね、先月まで実習できていた山田さんが、お礼になって、送ってくれたお酒なの。そのお福分け・・・。」

「ははは、香織ちゃんは、良く気が利くねえ、いつもありがとうねー。 じゃあ、俺は、ばあさんが待っているから、行くわ。 じんべいさん、あとは頼んだよ。」

「それじゃあ・・・。 お嬢さん。」

徳兵衛は、ホッとした表情で翔子に声をかけた。

翔子は、お礼を言いながら深々と頭を下げた。

徳兵衛はトラックに乗り込むとすぐに、大きなエンジン音が唸り声を上げて辺りの空気を揺さぶり始めた。

徳兵衛は一度アクセルを強く踏み込み、ゆっくりとクラッチを離した。 トラックはゆっくり動き始めた。

トラックの赤いテールランプが、どんどん小さくなっていった。

トラックが見えなくなると鮫島は、翔子を家に招き入れた。

家に入ると、あらためて申し訳なさそうに翔子が頭を下げた。

鮫島も香織も思いがけない来客を、快く迎え入れた。

翔子は、鮫島の好意に甘えて、食事の前にシャワーを使わせてもらうことになった。

30分ほどして、翔子が浴室から出てきた。居間に戻った時には、白っぽくホコリをかぶっていた黒いキャリーバッグは、綺麗に拭かれて、ソファの横に置いてあった。

そして、食卓には3人分の食事の用意が整っていた。

翔子が、鮫島の向かいの席に着くと、すぐに香織がキッチンから料理を運んできた。

既に部屋中にカレーのスパイシーな香りが漂っていた。

「翔子さん。おじさん特性の、夏野菜カレーなんですよっ・・・。私は火の番をしただけですけど。」 と笑いながら香織も席について、夕食が始まった。

鮫島は、少し不安げに翔子を見つめていた。

翔子は、ふわふわと湯気の上がるジャガイモを、

「ふーっ」と息を吹きかけながら、口に運ぶと、満足そうに笑みを浮かべた。

そして、鮫島を見ると

「イジイ ウマカナア」と嬉しそうに言った。

翔子は、きょんとした表情の、鮫島と香織を見ると、

「ふふふ、祖母の故郷の言葉で、とても美味しいという意味なんです。実は、お家に上がらせて頂いたときから、このスパイスの香り、とても気に入っていたんです。 ふふふ おなかがぺこぺこでした。 」

それを聞いて鮫島は、
「あ～ 良かった。もしお口に合わなかったら、街の食堂から出前を取らないといけないかなあ。とちょっと考えました・・・・・・。
でも、その場合は、出前が届くまでに、あと2時間ほど夕食はお預けになりますけどね・・・・・・」

「え～っ 2時間も一・・・・・・」翔子は力なくそう言った。

その一言で3人は、同時にに笑いだした。
久しぶりに、笑い声のある食事に、鮫島は内心ほっとしていた。

食後の団らんのあとで、翔子は、香織に実習生が使っていたという2階の部屋に案内された。

8畳間ほどのその部屋は、綺麗に整頓され、木製のベッドと机、腰の高さほどのチェストが置かれていた。

そして、壁に細い木枠に納められた絵が飾られていた。

ホンマ タケオとサインが入ったその絵には、夏の牧場の風景が描かれていた。その絵は、殺風景と思えるほど彩りのないこの部屋の中で、不思議ほど存在感があった。

そして、机の横には大きな木枠の窓があり、斜めに勾配のついた天井には、1メートル四方ほどの天窓が付いていた。

室内はもちろん、家全体が雑誌に出てくるような、北欧の住宅を思わせる造りになっていた。

「本当に、急にお邪魔してごめんなさいね。」

あらためて翔子がそう言うと、香織は、にこりと笑って

「翔子さん、ぜんぜん平気ですから、気にしないでください。何かあったら遠慮なく声をかけてくださいね。

それから、このTシャツ、覚えていらっしゃいますか？

先ほど叔父が言ってました。翔子さんが選んでくださったものだって。

どうもありがとうございます。すっかり私のお気に入りの一つになりました。

もう一着のジャケット。本当はもったいないんですけど、たまに通学の際に、着て行くんですよっ。」

「まあ、そうなのー 気に入ってくれて、本当に良かったわ。」

翔子は嬉しそうに顔をほころばせた。

「それじゃ　おやすみなさい。」

そう言うと、香織は階段の反対側にある自分の部屋に入って行った。

香織が去った後、翔子は、キャリーバッグから衣類を取り出し、チェストの中に手際よく並べ替えた。ひととおり荷物の整理が終わると、翔子は「ふーっ」と息を吐きながら、ベッドに腰を下ろした。

『長い一日だった。・・・』　天井を見上げながらつぶやいた。

翔子は、思い出したように立ち上がると、香織が話していた方法で天窓のスクリーンを開け、部屋の明かりを消した。

ベッドに横になり天窓の方を暫く見つめていた。　しだいに、目が暗闇に慣れてきた。

やがて、天窓一面に、無数の光の粒が現れた。翔子は思わず声を上げた。

「なんて綺麗な星空なのだろう・・・。」

漆黒の闇から現れた数え切れないほどの星が、まるで大地に降り注ぐように煌めいていた。

うとうとと眠りについてた翔子は、話し声で目が覚めた。

耳を澄ますと、その声は鮫島のような音だった。部屋から廊下に出ると、吹き抜けになっている2階のユーティリティーから居間にいる鮫島の声が良く聞こえた。

翔子が階段を降りて行くと、鮫島が丁度受話器を置いたところだった。

「いやー すみません、起こしてしまいましたね。馬が難産のようで、これから直ぐ往診に行かなければいけません。」

2階から香織が顔を出した。

「香織ちゃん富田さんのところで馬が難産らしい。これから出かけるが、ちょっと時間がかかるかもしれない。」

香織は、良く慣れているらしく、鮫島からそう聞くと、

「わかりました。」と言いながら居間に降りてきた。

鮫島は、翔子と一緒に来るかと声をかけた。

どういう状況になっているのか想像もつかないまま、翔子はそれに従った。

香織は慣れた手つきで鮫島の準備を手伝うと、車庫の内側からシャッターを開けた。

「じゃあ香織ちゃん 戸締まりを頼むね。」 そう言って、鮫島は車のアクセルを踏み込んだ。

鮫島と翔子は、牧場へ急いだ。真っ暗な道路をヘッドライトの白い光線が一直線に伸びる。鮫島はさらにアクセルを踏み込んだ。

時折、ぱちっ、ぱちっ、という音を立てて、ヘッドライトの光に寄ってくる虫が、フロントガラスに当たってはじけ飛ぶ。

電話をかけてきたのは、牧場主の富田で、その話によると臨月を迎えた馬が、破水後1時間経っても子馬が出てこないのだという。

しかも、通常頭が上、足が下を向いて出てくるのだが、どうやら足が母馬の背中側に向いているというのだ。

「それは、下胎向と言って、子馬が仰向けになっている状態で、そのまま引っ張り出すと、しばしば産道の背側に穴を開けてしまうことになるんです。子馬の状態を見て、押し戻したり、体をひねったり、引っ張ったりしながら、正常な位置に戻してから取り出すんです。……上手くいってくれれば、いいんですが。」

鮫島はそう説明すると、無口になった。

30分ほど走ったところで車は序々に速度を落とした。
そして、牧場の看板を目印に、鮫島は左にハンドルを切った。

厩舎に入ると、既に3人の男が馬房に集まって母馬の様子を見ていた。 鮫島の姿に気がつくと、初老の小柄な男が、状況の説明を始めた。その男が牧場主の富田だった。

鮫島は、母馬の様子を気にしながら、富田から手短かに話を聞き終えると、鞆から薬品と注射器を取り出した。

まずは、弛緩剤の処置を施し、次に子馬の位置を直しながら引っ張り出す。鮫島はそう富田に説明した。そして母馬の怒責（どせき）、つまり、いきみがまだ強いので、最悪の場合のことも忘れずに付け加えた。

張り詰めた空気が漂っていた。

鮫島は、腕時計で時間を確認すると、今度は頭を出しかけている子馬の頭を少し押し戻すように手に力を込めた。

母馬は苦しそうに、ブルブルと弱々しくいなく。そして、ぐったりした子馬がようやく姿を現したのは、さらに30分ほどしてからだった。

「翔子さん、そのタオルを取ってくれませんか。」 鮫島は、タオルを受け取ると子馬の体を素早く拭き始めた。

そして、翔子にタオルを渡し、同じようにして体全体を拭くように伝えた。
羊水で濡れた子馬の体を、翔子は必死になって拭いた。

『しっかり。がんばるのよっ。』翔子は心の中で叫び続けた。

しばらくして、母馬がゆっくりと頭を持ち上げて腹ばいになった。まだ立ち上がることはできない様子だったが、子馬の方に首を曲げ、子馬の顔、首、胴体と体中をペロペロと舐め始めた。鮫島と翔子は敷き詰められた藁の上に横たわる子馬を、少し母馬の方に近づけてやった。

母馬は根気よく子馬を舐め続ける。するとぐったりしていた子馬の耳がピクリと動きはじめた。

さらに、だらりと首を伸ばしたまま横になって動くことができなかった子馬の首が、スローモーションの画面でも見ているように、すーっと持ち上がりかけた。

翔子は、鮫島の方を見た。鮫島も翔子の目を見ながら、首を少し縦に振った。

厩舎の中は静まり返っていた。馬房の外の3人の男たちは、声もなくじっと食い入るように子馬の様子を見ている。

深い沈黙の中で、子馬の生きることへの格闘が続いていた。自らの脚で立ち上がること。この子馬の運命は、唯一そのことにかかっていた。

『もし、立ちあがることができなければ……。もう一つの役割を果たさなければいけない。』 ある不安が、一瞬鮫島の頭をよぎった。

子馬は、何度か前脚から立ち上がろうとするが、腰から後ろは、まるで別の生き物のように、すぐに弱々しく崩れ落ちてしまう。翔子は、その動きをもどかしい思いで、見つめていた。

鮫島は、頻繁に腕時計に目をやった。しきりに時間を気にしている様子が翔子にも伝わってきた。

子馬のその状態が続いて、20分あまりが過ぎようとしていた。

『がんばれ、がんばれ。』と翔子は、必死になって心の中で叫び続けた。

その時だった。馬房の中で一瞬、光が走った。翔子は、『はっ』とした。

それと同時に、3人の男たちから歓声が上がった。

「おおー 立った 立ったぞっ。」

「ははは・・・、よく がんばったなあー。」

馬房の重苦しい空気が、一瞬にして変わった。

翔子は、経験したことのない、心の奥底から湧き上がるような、熱い感情を必死に抑えていた。

鮫島を見ると、鮫島は、穏やかなやさしい目で、プルプル震える4本の脚で必死に立ち続ける子馬の姿を見つめていた。

鮫島は、翔子の視線に気がつくと、ニコッと表情を緩めて、ポンポンと翔子の背中を叩いた。

「良かった・・・。 お疲れさま。」

翔子は、熱くなった目頭しらを必死に指で抑えた。しかし、とうとう堪えきれずに、大粒の涙が、すーっと頬を伝って溢れ落ちた。

長い夜が、明けようとしていた。

鮫島と翔子が家に戻ると、香織が既に起きて顔を洗っているところだった。
翔子は驚いて香織に声をかけると、

「毎週水曜日の朝は、早朝の英会話教室に通っているんです。それが終わってから学校です。」
香織が答えた。

香織は、急いでトーストとホットミルクの簡単な食事を済ませると、鮫島の車で駅に向かった。
。

翔子は、香織の使ったカップとプレートを洗い終わると、あらためて部屋の中を見渡した。
外はすっかり日が昇り、小鳥の声が時折聞こえてきた。その静けさの中にいると、東京の生活はまるで、雑踏の中で暮らしているようなものを感じた。

その時、隣の部屋に続くドアのガラスを、内側から覆っているスクリーンの陰で、黒い影がすーっと動いた。
その度に、シャカシャカという、奇妙な音がする。

「まただわ・・・。」

翔子は、不安げな表情になった。

『この得体の知れない黒い影は、一体何なんだろう・・・。きっと何か生き物が、いるに違いない・・・。』

翔子の不安は、確信に変わっていった。
「こうしているより、思い切って、中を覗いて確かめてみようかしら・・・。」

そう決心すると、翔子の行動は早かった。

翔子は、そーっとドアに近づき、ドアレバーに手を当てた。耳を澄ませて中の様子を伺いながら、ドアレバーを静かに押し下げた。

少し開いたドアの隙間から翔子はそっと中を覗いた。動きがぴたりと止まったように、部屋の中は物音一つしない。

次の瞬間、翔子は何か鋭い視線を感じて『ハッ』とした。こめかみのあたりが、緊張でピクピクと痙攣したように動き始めた。

翔子は、ドアをさらに少し押し開いた。
すると突然、バツとドアの陰から黒い影が、翔子の目の前に現れた。

「うわああああ・・・。」思わず翔子は、のけぞるようにして、悲鳴を上げた。

突然現れた影は、動きの止まった翔子を見ると、直ぐに悪戯っぽく頭を傾げながら、大きなしっぽを左右に振った。

「ああー もーっ びっくりしたなー あなただったのねー ふふふ さあ、こっちにいらっしやい……。」

翔子の前に現れたのは、クリーム色のふさふさした長い毛に覆われた、ゴールデンリトリバーだった。

翔子のその一言で、一瞬動きが止まったその犬は、嬉しそうに、しっぽを振って、翔子の両手に勢いよく飛び込んだ。

翔子の腕の中で、その犬は、舌をぺろぺろ出してまとわりついた。

「ふ ふ ふ もうー この子は。 よしよし あなた お名前はなんていうのかな？……。」

翔子は、ふと首に巻かれたバンダナに書かれた文字を見つけた。

「アン？ アンくん じゃ……あないわよね…… アンちゃんというのかな？ん？……」

「ただいまー」丁度そこへ鮫島が戻ってきた。

「あり？？ 翔子さんは ワン子 平気でしたか？」

翔子は、鮫島の方に振り向くと、ニコニコしながら、『はい』と無言のまま顔を縦に振った。

「ははは、アンちゃん。 良かったねー……お友達ができて……。 アンちゃんはメスの3歳。人間で言うと……26歳くらいのお嬢さん。ってところでしょか。」

鮫島も相当犬好きと見えて、そう言いながら表情を崩して、アンの顔を見ながら、両手でアンの顔をなでまわした。

『翔子さんは、もしかすると犬が苦手かもしれない。』そう思った鮫島は、香織に言って、ひとまずアンをサンルームに入れておくことにしていた。鮫島はそう翔子に説明した。

朝食の間中、アンは翔子の傍から離れなかった。

食事が済んで、鮫島は診察室に向かった。翔子は後片付けをすますと、鮫島に言われたとおり、窓を開けて網戸を下した。

涼しい空気が、部屋の中をすーっと流れ始めた。

翔子は、アンがいたサンルームに入った。ガラス張りになっているその部屋は、陽が良く入り、外はウッドデッキになっていた。

部屋の中は、いたってシンプルで、オーディオ機器の置かれたローボードとリクライニングの

椅子、そしてソファがあり、部屋の隅に、電子ピアノが置いてあった。

翔子は、鮫島に教えてもらった方法でリモコンを操作すると、静かに曲が流れ始めた。それを確認すると翔子は、座り心地のよさそうなリクライニングチェアに腰を下ろした。

翔子は、背もたれを少し後ろに倒した。

予定がびっしり詰まった、昨日までの慌ただしい毎日がウソのように、ゆったりと流れる時間がそこにあった。

アンは、翔子に寄り添うようにしてうつ伏せになった。翔子はアンの温もりのある、ふさふさした毛を、心地良さそうに撫でているうちに、いつの間にか深い眠りの中に落ちていった。

「コトッ」という音がして、翔子は、ぼんやりとした意識の中で、手を伸ばした。

アンの温もりを手のひらで確かめると、すぐにまた動かなくなった。

「そろそろ、ご飯にしましょうか。」鮫島の声だった。

翔子は、ハッとして起き上がった。そして床に落ちた膝かけを、あわてて拾い上げた。

どうやら、気が付かないうちに、鮫島が膝にかけてくれたようだった。

翔子は、手触りの良い、そのひざ掛けを丁寧に折りたたむと、鮫島に照れくさそうに礼を言いいながら手渡した。

いつの間に用意したのか、食卓には既に料理が並んでいた。

「あ～ 鮫島さん申し訳ありません。わたしお手伝いもしないで・・・」

「疲れたでしょっ 気にしないで、ゆっくりしてください。と言っても、初日からいきなり徹夜仕事に引っぱりこんじゃいましたからねー。」

「鮫島さんの方こそ、お疲れじゃないですか？」

「ははは、僕は慣れてますから・・。 徳兵衛さんが、アスパラを持ってきてくれました。」

鮫島は頭をかきながら続けた。

「実はですね・・、診察台の上で横になっていたら、徳兵衛さんに、起こされちゃいました。」
と言うと無邪気な表情で笑いだした。

「ふふふ そうだったんですか・・。」

翔子もそれにつられて、声を出して笑った。

食卓を見て翔子は驚いた。

トマトとモッツァレラチーズのカプレーゼ、グリルしたアスパラとチキン。

そしてホイルに包まれたジャガイモは、溶けかけたバターがほかほかと湯気を上げ、

一層食欲をそそった。

「さあ冷めないうちに・・・。　　は～い、アンちゃんは　こっちだよー・・・」

翔子は、鮫島の意外な一面を感じていた。

食事を終えたアンは、すぐにまた翔子の傍に来て、うつ伏せになった。

「アンは、翔子さんのそばが、よほど心地いいらしい・・・。

アスパラも、・・・おいしいでしょ。取れたては甘いんですよー。

本当はワインが飲みたいところですが・・・、翔子さん。　あとでとっておきの場所を御案内しますから。　食事が終わったら、すぐに出かけましょう。」

「お仕事の方は、大丈夫なんですか。」

「自信を持って大丈夫です。って言うのもちょっと残念なんですけど・・・。

今日なんか、半日開いて、やって来たのは、徳兵衛さんだけですからね・・・。

徳兵衛さんに、注射を打つわけにもいきませんし・・・。」

「ぷふふ・・・そうですね。」　　鮫島の一言に、翔子は思わず吹き出した。

「まあ大丈夫でしょう。それに何かあれば、携帯電話に連絡が入りますので・・・。」

鮫島のこの些細なことにこだわらない、ゆったりした振る舞いと、おおらかな話し方が、不思議と翔子に安心感をもたらしていた。翔子は、何の疑いもなく、

『そう言われてみればそうか・・・と』すぐに納得してしまった。

鮫島は、走り慣れた細い農道を縫うように走り続けた。30分ほど走って、車は大きなゴルフ場の看板のところに出てきた。

鮫島は、そこで右のウィンカーを点滅させた。

木々に囲まれた緑の小径が続いていた。時折、折り重なった枝と枝の隙間から、明るい日差しがフロントガラスに差し込んできた。

やがて、視界が一気に広がり、駐車場を示す矢印に沿って、鮫島は車を進めた。ほどなくして、車は駐車場に辿り着いた。

「翔子さん、着きましたよ。」 二人がドアを開けて外に出た瞬間、森の香りに包み込まれた。

「う～ん いい気持ちー」 翔子は思わず腕を伸ばして深呼吸をした。

鮫島は、アンを外に連れ出すと、ロープで作られたハーネスを、アンの前肢から肩側にロープを回して装着するとハーネスを翔子に手渡した。

「これなら首に負担がかかりませんね。今はこういうハーネスがあるんですねー。」

「わんちゃんに優しいハーネスですよ。昔は首輪にロープが定番でしたけど・・・」

鮫島は、園内を案内しながら一緒に歩き出した。

「ここが、”あの森”・・・ですか。」

「ええ、ここです。 アイヌ語で、”豊かな森” という意味らしいです。 この向こうがゴルフ場ですね。」

駐車場から少し歩くと、大きな沼が見えてきた。その手前に管理棟があった。

森そのものが天然のフィルターになっていて、そこで生まれた清らかな空気が、体の中を音もなくすーっと通り抜けていく。 そんな心地良さが、ここにあった。

鮫島と翔子は、管理棟のテラスで、いったん立ち止まった。籐で編んだ籠からこぼれ落ちるように、色とりどりの小さな花々が咲いていた。 その花びらは、まるで蝶が羽を広げて舞っているように、ひらひらと心地よい風の中で揺れていた。

大きな沼の左手は、北欧風のコテージが、森の中に溶け込むように、ひっそりと立ち並んでいた。

そしてその対岸は、深い森に覆われた散策路になっているようで、管理棟の脇から小径が森の奥へと伸びていた。

「こんにちはー」 園内の手入れをしているスタッフが鮫島たちに声をかけてきた。

「ああ お疲れ様です。今日は天気も良くて、作業がはかどりますねー。」 鮫島は笑顔で応えた。

「アンはもう顔パスなんですよっ。 じゃっ 行きましょうか。」 鮫島と翔子はアンと一緒に森に向かって歩きはじめた。

沼から流れ出る小川の上に、小さな木の橋が架かっていた。そこを渡ると、水面を、ひんやりとした心地よい風がさらさらと流れてきた。

森の中をしばらく歩き続けると、対岸のコテージが正面に見える沼の畔に出てきた。二人は、木立の中に置かれた木製のベンチに腰を下ろした。

アンのふさふさした毛先が、水面を渡って流れてくる心地よい涼風の中で、時折向きを変えた。

「こういう景色があったんですねー……。 いつも この景色の上を飛んでいたなんて……。」

「でも、考えてみると不思議なご縁でしたね。」 鮫島は、翔子と出会った日のことを話はじめた。

「ふふふっ 今思い出しても 可笑しくって……。」 翔子は、折り曲げた人差し指を口元に添えるようにして、堪えるように笑った。

その日、翔子が搭乗した飛行機の後方の座席は、観光帰りの団体客でほぼ埋め尽くされていた。鮫島はその一番後ろの席に座っていた。そして翔子達CAは、出発前の安全確認で慌ただしく動き回っていた。

トラブルは、その機内で発生した。

少し遅れて、ビジネスマン風の中年の男が乗り込んできた。自分の鞆を入れようとした男が、荷物入れのふたを開けた。すると、突然大きな声を上げた。

「何だ、荷物を入れるところがないじゃないかぁ。」

一瞬、周りは静まりかえった。それに気づいた翔子が、素早くその男のところにやって来て、丁寧に詫びながら、直ぐにほかの物入れを確認し始めた。

だが既に、何処にも空きスペースが見つからない。翔子は、その男にあらためてお詫びを言うと、荷物を預かせてほしいと申し出た。しかし、その男の怒りは一向に収まる様子がない。

ちょうどその時だった。翔子の側にいたサングラスをかけ、あごに髭を蓄えた長身の男が、すっと立ち上がると、物入れから自分のバッグを取り出し、翔子に話しかけた。

「エクスキューズミー もし良ければ、ここを使ってください。私は大丈夫。私は座席の下に入れますから。」

ゆっくりと穏やかな声の英語であった。

翔子は、英語でサングラスの男に礼を言うと、ビジネスマン風の男に、その男の申し出を伝えた。
そこでようやくビジネスマン風の男は、翔子に鞆を預けた。

鞆を預かった翔子は、その鞆を物入れに仕舞おうと両手で持ち上げた。すると、サングラスの男がその鞆を下から両手で支えるようにして、手伝った。

「まあああ、外人さんは優しいわねえー・・・。」 側にいた団体客の中からそんな声が漏れた。

ビジネスマン風の男は、急に静かになって、無言のまま、サングラスの男の隣の窓側の席に座った。

飛行機が羽田に到着するまでの間、ビジネスマン風の男は隣に座るサングラスの男に話しかけたそうにして、何度も顔を向けた。

しかし、腕組みをして下向き加減に静かに寝ている様子に、とうとう声をかけるのを諦めてしまった。

羽田に到着後ドアが開くと、待ちかねた乗客達は足早に出口に向かって動き始めた。
次第に機内は静かになっていった。

サングラスの男は、立ちあがると足元から自分のバッグを取り出し、次に物入れから隣の席に座った男のバッグを取り出すと、それを丁寧に男に渡した。

「サンキュー ベリーマッチ」

「ノープロブレム どういたしまして」

ビジネスマン風の男はバッグを持つと、何事もなかったように、そそくさと出口に向かって歩いて行った。

その後ろ姿を確かめるように見ていたサングラスの男は、めがねを外しながら、後ろに立つ翔子の方を振り向いた。

優しい目をした、その男は、ニコニコと笑顔を浮かべながら口を開いた。

「どうも、お疲れさまでした。」 流暢な日本語だった。

翔子は、一瞬戸惑った表情をしたが、すぐに表情を崩して、満面の笑顔で礼を言った。

「ふふふっ 鮫島さんのお芝居だったなんて。 私 すっかり騙されました。」

「別に、騙すつもりはなかったんですけどね、日本人って、弱いでしょ。 外国の方に・・・。
それより、実は、のどが渴いていて、飲み物を欲しかったんです。でも隣で話したそうにしているし、あの時は、寝たふりをするのが結構大変だったんですよー。
それよりも・・・、翔子さんには、僕の方が騙されましたよ・・・。」

それは二日後のことだった。

会議が予想以上に伸びてしまった鮫島は、帰りの飛行機の時間を気にしながら、買い物をするため銀座のデパートにやって来た。

鮫島は、1Fの案内係に売り場を確認すると、エスカレータを歩きながら昇りはじめた。

それは丁度鮫島が、目当てのフロアーに着く時のことだった。

幼児が伸ばした手に鮫島の肩が触れ、幼児の持っていた小さなぬいぐるみが、ころころと足元に落ちてしまった。

鮫島は、慌ててその小さなぬいぐるみを拾い上げると、お詫びを言いながら、その母親に渡そうとした。

「あれっ・・・もしかして・・・」

「まあ・・・」 二人は同時に声が止まった。

鮫島と翔子は、偶然そこで再会することとなった。

鮫島が、北海道に戻る前に、姪に頼まれた服を買うためにここに来たのだと聞いた翔子は、機内でのお礼にと、鮫島の買い物の手伝いを、快く引き受けた。

いったいどんな服を選んだら良いのか悩んでいた鮫島は、子供を連れている翔子に恐縮しながらも、、内心ホッとした。

ようやく、ジャケットとTシャツを決め、会計を済ませると、二人はエレベータに向かった。
すると、先程まで温和しく翔子に抱かれていた幼児が、急にグズりはじめた。

「あの子ったら、急に泣き出すんですもの・・・。」

必死に幼児をあやす翔子の腕の中で、幼児は「ママ、ママ」 と泣き出してしまったのだ。

そこではじめて、鮫島は翔子の姉がデパート内の美容室へ行っている間、翔子がその子の世話をしていることを知った。

「僕はてっきり翔子さんの・・・、お子さんかと思っていました。」

鮫島も一緒になって、幼児をあやしていたが、飛行機の時間が迫っていたため、鮫島は、翔子に買い物のお礼を言うと、

「今度、時間があったら、いつでも遊びに来て下さい。あのクローバーファームの隣で、獣医

をやってますから、すぐにわかります。」そう翔子に告げてエレベーターに乗り込んだ。

それから9ヶ月。その翔子が今こうして同じ場所にいる。
鮫島は、あらためて不思議な出会いを感じていた。

「様々な、出会いがあるものですね一つ。」

「ほんとうに・・・そう思います。何よりも、あの時の翔子さんがここにいるなんて、昨日はほんとに、びっくりしました。」

「そうですね。 ごめんなさい。 突然押しかけてしまって。」

「あっ いえいえ、そういう意味じゃなくて・・・失礼な言い方、かもしれませんが、翔子さんを見ていると、僕の妹、つまり香織の母なんですが、雰囲気がよく似ているなあと思っていたんです。それと、実は妹も、飛行機に乗っていたんです。」

「えっ 妹さんも?・・・」

鮫島の意外な一言で、翔子の気持ちはすっと軽くなった。

「妹は、幼い頃から飛行機が好きで、中学に入る頃にはもう将来は何になるかって決めていたんです。

ところが、僕が大学最後の夏休み、家に帰ると、妹の様子が少し変だったんです。
妹は、僕には何でも、良く相談してくれていたので、『どうしたんだ。』と聞くと、『C Aになるのを諦める』というんです。『体が弱い母の面倒を見ないといけないと思っている。』と

。母も僕も、妹の夢は知っていたので、『そんな心配はするな。来春卒業したら自分はここに戻ってくるつもりだ。母さんも俺も、おまえの制服姿をどんなに楽しみにしているか。夢を叶えて、制服姿を母さんに見せてやれ。あとのことは心配するな。』 そう言ってやりました。」

「それからまた思い直して、勉強を再開したようです。 運良く試験に合格して、その時は母と二人で、泣いて喜んでいました。訓練が始まって、母には良く電話が来ていたようです。訓練のことや、制服の採寸があったとか。制服が支給された日は、喜んだ声で電話が来ていました。

ところが、O J Tの頃は、元気を取り柄の妹も、さすがに自信を無くして、落ち込むこともあったようです。でも母は喜んでいました。」

「妹さんやお母様のお気持ち、良くわかります。それで妹さんは・・・。」

「妹は、結婚しても飛行機に乗ることを望んでいました。やがて香織が生まれて、子供のためにといって、ベースを東京からこっちに移してもらって、乗務を続けていたんです。ところがある時、膝に何となく違和感があると言って、市内の病院で診てもらったら、その時は足に水がたまっただろうと言われて、最初のうちは我慢しながら乗務していたようです。」

「しかし、腫れも引かないし、だんだん痛みがひどくなって、それで大学病院で診てもらうことになりました。骨肉腫でした。それから妹の苦しい闘病生活が始まりました。」

「初めのうちは妹も気丈に、良く頑張っていたんです。でも、いつの頃からか、自分は長くもたないのではないかと感じはじめていたようです。」

「しきりに、香織のことを心配していました。

ある日、見舞いに行くと、その日は少し元気そうにしている、『また、飛行機に乗りたい。』
・・・ そう言っていました。・・・ それから3日後、容体が急変して・・・。」

「まだ幼い香織に、『おじさん、お医者さんでしょ。 ママを助けて、お願い・・・ママを助けて・・・』 そう言って、泣きつかれました。 妹には、最後は、何んにもしてあげられませんでした。」

「香織の父親は、元々海外勤務が長くて、プラントの技術者なのですが、子供を育てるには学校も日常の生活も環境も整っている日本の方が良いだろう。 ということで、相談してうちで預かることにしたんです。 一時は、日本に戻ったときもあったんですが、直ぐにまた海外の現場に出てしましまして。」

「あっ、いかんいかん、なんだか僕ばかり話をしてしまって、申し訳ありません。」

「いえ、いえ、そうだったんですね。 今のお話を伺うと、私の方は悩みだなんて言うのが恥ずかしく思ってしまうです。」

翔子は、鮫島と自分の間に静かに座っているアンの首を優しくなでると、少し、はにかむようにして話し始めた。

「私、おばあちゃんっ子なんです。」

「ああ、 イジイ ウマカナア のおばあちゃん？」

「ふふふ、 ええ ・・・。」

翔子は嬉しそうに、返事をする、また話し始めた。

「両親が小さな花屋さんをお営んでいたの、姉と私は母方の祖母に、小さい頃から面倒を見てもらって。とにかく、明るくて、元気な祖母で、私は叔母達に、翔子は祖母に良く似ていると言われるんです。」

「私が、CAになった頃、その頃は既に80歳を過ぎていたんですが、翔子の飛行機に必ず乗るんだと言って、私が祖母の郷里の熊本に飛ぶことになった時、一人じゃ心配だからと言って、姉が祖母と二人で乗ってくれたんです。」

「熊本に無事着いて、飛行機を降りるとき、祖母ったら、乗務していた先輩一人一人に挨拶して、翔子をよろしくお願ひしますって。 もう恥ずかしくて・・・、顔から火が出る思いでした。 心の中で、『おばあちゃん、早く降りてー』って、叫んでいました。」

「それで、ようやく降りてくれたので、ホッとした時、祖母がふいに立ち止って、振り向いたんです。

『えーっ？』 と思っていると、 『翔子さん制服姿美しかねー、それじゃ皆さん。』

と深々と頭を下げて・・・。

とっても嬉しそうでした。 恥ずかしいと思ったんですけど、あの日は、とても心に残るフライトでした。」

「その日に乗務していた先輩の一人が、今は私の上司なんですが、先日呼ばれて、『あなたどうしたの？最近笑顔が少ないわね。少し休暇を取って、ゆっくり体を休めなさい。悩み事なら、いつでも相談に乗るわよ。』

そう言われまして・・・・・・・・。それもあって、今回お休みを頂くことにしたんです。休みは、暫く会っていない友人と食事をしたりしようかとも思ったんですが、ふと『そう言えば、あの時・・・。』と、鮫島さんがおっしゃって下さったのを思い出して・・・・。それで、ここに・・・・。」

「そうでしたか。でもね、なんか、少し嬉しかったですよ。 ああ、またお会いできたんだ・・・・とね・・・・。」

「この仕事をしていると、色々な方とお目にかかって。それが喜びに感じるときもあれば、お叱りを受けたときには辛く感じることもありますね・・・・・・・・。」

「翔子さん達は、いつも笑顔で、乗客に接することを求められるでしょ。

でも、もし飛行機にトラブルが起きると、その時は真っ先に乗客の安全を守るために、体を張って行動するように厳しい訓練を積み重ねてきているんですよね。そういう大変なお仕事だということは、実は僕たちも、日頃、あまり意識していませんからねー。 厳しい訓練に耐えて、使命感というか、仕事に対するプライドを、日頃から強く意識していないと、いざというときに的確な行動ができないでしょう。自分を磨いているから、あの制服姿も美しく見えるんでしょうねえ。でも、いつも笑顔でいることって、それが仕事でも辛い日もあるし、仕事のために、ストイックに自分をコントロールする。と言っても、それはそれで限界がありますよね。」

「先輩達の中には、そういうふうに立派な方々が沢山いらっしゃいますけど、私はまだまだ未熟者なので・・・・」

鮫島と話をしているうちに、翔子は、自然と打ち解けたように、話し始めた。

鮫島は、翔子の話に相づちを打ちながら、静かに聞いていた。

「ところで、飛行機を降りる時って、皆さんそれぞれ、きっかけがあるんでしょうね。」

「ええ、飛行機を降りる時は、みんなそれぞれですね。寿であったり、もっと自分のやりたいことがあるからとか、体調を壊して、ということもありますね。よく『飛行機に乗って飛んでいるだけ。』と思われるんですけど、機内はGもかかって、やはり体には負担がかかるんです。・・・・・・・・」

「私も、最近、オフの日はぐったりして『一日中、何もしないで部屋にいたい。』 と思ったり・・・・。

小さい頃から夢に描いて、ようやくこの仕事に就いたんですけど、年を重ねていく中で、『自分は、本当にこの仕事に向いているんだろうか』、とか、『自分は、会社の役に立っているんだろうか。』とか・・・・考えることが多くなりました。・・・・あれほど大好きな仕事だったのに、自信というか、心の置き所が消えかかっているようで・・・・。」

「どの仕事もそうでしょうが、経験を重ねていく中で、組織に求められる役割も、次第に変わっていくでしょうねー。」

「ええ、それに、後輩達は、どんどん入ってくるし。色々考え始めるとなんだか不安になってきて・・・。」

そう言う翔子は、少いうつむき加減のまま無口になった。

しばらくして、翔子は、『ふうーっ』と息を吐くと、

「実は、友人がアメリカに行くことになったんです。しばらくは向こうの大学で研究を続けたいと言うことで、ずっと彼の夢でもあったことなので・・・。

一緒に来てくれないか。と言われてるんです。支えて欲しいって。

来週末には出発することになっていて、私も後から渡米して、向こうで新しい生活を始めるのもいいかなって考えていたんです。その話を聞いた頃は、まだまだ先のことだと思っていて、ゆっくり考えて決めればいいと思っていたんです。

アメリカに行って、新しい環境の中で、新しい生活が始まる。それもいいかなと思いながらいたんですね。

でも最近、何故か不安ばかりが多くなってきて・・・。『まあ、なんて贅沢な悩みなの。』って、友達には言われるんですけど・・・」

「う～ん そうだったんですかー」

鮫島は、そう言ったまましばらく考え込むようにして、ぼんやりと空を見上げた。

青い空に、白い飛行機雲が、北の空に向かって伸びていた。しばらくそれを見ていた鮫島は、おもむろに口を開いた。

「失礼かもしれませんが、僕が思うに、翔子さんは自分にもっと自信を持ってもいいんじゃないですかねー。恐らく翔子さんは、一生懸命仕事に取り組まれてこられたんだろうなーと思います。

あの時も、怒った乗客に対する接し方や、翔子さんが取られた機内の振る舞いで、それは良くわかります・・・。

後輩にはその姿を自信を持って見せてあげればいいんじゃないですかねー。それと、もう一つは・・・。勇気を持って、決断することが必要となる時がある。ということかなあ・・・。」

「ゆ・う・き・・・ですか？」

「うん。 そう、勇気ね。 人生と言うと少し大袈裟になるかもしれませんが、勇気を持って決断をする時が、必ずあると思うんですよ。今は、ひょっとすると、その時なのかもしれないね。」

『鮫島の言葉は、的を射ているのかもしれない。・・・』 翔子はぼんやりとそんなことを感じ始めていた。

「私が、もし鮫島さんの妹だとしたら、鮫島さんは私になんと言いますか？」

鮫島は、一瞬戸惑いの表情を見せた後で、すぐに、目尻を緩ませながら、腕組みをすると

「そうだなあ、妹だったらね・・・、う~ん　もっと　びしっ　びしっ　と言うかなあ・・・。」

「まあ・・・」

「ふふふ、それは冗談ですけど、言うことにあまり変わりはないと思います。妹であろうが、翔子さんであろうが。」

「最後は、妹自身が決めて前に進んで欲しいと思うので・・・。　う~ん　そうですねー・・・　強いて付け加えるとすると、『困ったときは、原点に戻れ。』　そういう言い方をするかもしれませんね。」

「原点・・・。自分の原点・・・。そして、　勇気・・・。　どれも重みのあるお言葉ですね・・・お兄さん・・・。」

感心したように、親しみ深い表情で、翔子が首をかしげながらそう言うと、鮫島は、自慢げに

「でしょー　？」　と言葉を返した。　その一言で、二人は同時に声を出して笑いだした。

「そう言えば、翔子さん。さっき学生時代にマーチングバンドでサックスを吹いていたと言っていましたね。」

「えっ、あ　はい。」

「うん、うん・・・それは、良かった」

一瞬、鮫島の目が、妖しく光ったのを、翔子は気づくはずもなかった。

その夜、鮫島は翔子と連れだって車で出かけた。着いたのは古い校舎を手直しして作られた、地域の交流センターだった。

鮫島と翔子は、玄関でスリッパに履き替えると、右手で音がする部屋の方に向かって歩きだした。

鮫島が、その部屋のドアを開けると、真っ黒に日焼けした二人の男が待っていた。

「おはようございまーす」鮫島が、挨拶をすると翔子もそれに習って頭を下げた。

「おーっ じんべいさん 待ってましたよー」 鮫島より少し年配の背の低い男が立ち上がった。「お疲れ様です。じんべいさん」

同時に、ギターを持った若い男が立ち上がった。

「翔子さん、バンドマスターでドラムの山崎さんと、ベースの福本くんです。」

二人とも、真っ黒に日焼けした顔をほころばせながら、翔子に挨拶をした。

鮫島はあらためて、翔子に二人を紹介した。

翔子は、二人の男を見てすぐに、山崎は、英語混じりのトークを売りにしているタレントにどことなく雰囲気似ていて、陽気そのもの。一方の福本は、学生服の襟のホックまでしっかり掛けるような、生真面目さを感じさせる。そんな印象を持った。

「いやー翔子さん、お待ちしていましたー。じんべい・・・、あいや鮫島ちゃんから 「新人発掘」 の連絡がありましてね、福ちゃんと二人で楽しみにお待ちしておりますよー。」

「えーっ？ 新人・・・ハックツ とおっしゃいました？」

翔子はあっけにとられながら、思わず鮫島を見た。

「はははは、まあ それはあれですねえ 言葉の広がりといいますか・・・、ハックツじゃなければ・・・、発見？それとも・・・参上・・・ですかね・・・ははは」鮫島は、力なく笑った。

「翔子さんは、学生時代サックス吹いていたんですって。 そうですか、そうですか いやー奇遇というか何というか。 なんてラッキーな出会いでしょうかあ。 翔子さんも・・・そう思うでしょー？」

翔子はあっけにとられた。しかし、山崎の、両手を使って、大きなジェスチャーを見せながら話す仕草を見ているだけで、翔子は可笑しくなって、必死に笑いを堪えた。

「いやー 実はですねえ 翔子さん。 僕たちのバンドのステージが近々ありましてねっ・・・。 まだまだ二日も先のことなんですけど・・・。 ずーっとサックスできるメンバーを探していたん

ですよー。」

すると翔子は、微笑を浮かべながら子供を諭すような口調で言葉を返した。

「ふふふ、・・・でも、私は、学生時代に少しやっていただけですから・・・、お力になれないと思います。

それに、卒業してから随分、日が経ってますし、人前で吹くなんて、どう考えても無理ではないでしょうか・・・。

それから・・・、今確か、まだまだ二日も先とおっしゃいましたが、　それって　何か、とても違和感のある日本語ですね。」

「いえいえ、翔子さん人生塞翁が馬。人生何処でどうハッピーになるか、わからないんです。」

「ふふふふ、　私も・・・マスターのお話・・・ゼンゼン意味がわかりません。」

「ですよ。　ははははは。　ところで翔さんはっ、この曲、ご存じですか？」

山崎は、そう言うと言面を翔子に手渡した。

それは、ビリージョエルの曲だった。

「Just the way you are・・・素顔のままで・・・」

「ええそうです。じんべいさんから翔子さんの話を聞いた時、僕は真っ先に閃いたんです。よし今年はこれだっ。てね。・・・」

「この曲の中で、アルトサックスは、間奏とエンディングに使われているんです。メロディーを聞いていると、胸が締め付けられるようなメロー（mellow）な旋律は、何度聞いても、心を揺さぶられます。そういうパワーがあるんですよ。」

「アルバムで演奏しているのが。フィルウッズ。彼はあまり日本では知られていないかもしれませんが。でも、向こうでは、結構有名で、グラミー賞を4回も受賞しているんです。」

「この曲は、ビリーのボーカルもさることながら、フィルウッズの吹く、このアルトサックスの音色を聞いて、ファンになった。そういう人も結構いると聞いています。」

「じんべいさんがピアノとボーカル、ベースは福ちゃん、ドラムが僕、そしてアルトサックスは翔子さんです。」

「少し照明を絞ったステージ。じんべいさんのボーカルが静かに始まる。僕はパンチを効かせてテンポ良くリズムを刻み、福ちゃんのベースが曲全体に深みを与え、テクニクとテクニクのぶつかり合いです。そしてステージが盛り上がったところで、静かに翔子さんの間奏が始まる・・・。

翔子さん、ほら、想像してみてください。　彼女を連れてやって来た男子は、うっとりする彼女を横目に、どうだ来て良かっただろうと、少し得意げな顔になって、それを見ながら僕たちは、もうこれでもかってくらい、いい音、聴かせてやるんですよー。　くーっ、よーし　だんだん　楽しみになってきたぞー　・・・ね～え　いいでしょー？　翔子さん。」

鮫島と福本は、にやにやしながら二人の会話の成り行きを見守っていた。

「ふふふ……。　上手くいけばいいですねえー」

「で　しょう？・・・あれ？・・・翔子さん。　なんかですねー、その　何となーく人ごとのように聞こえる、その話し方・・・翔子さんには、似合わないんじゃないかなああ　・・・」

「ふふっ、でも私、残念ですが今はサククスも持っていませんし・・・」

翔子のその一言を聞いて、山崎は嬉しそうに足元に手を伸ばした。
そして、黒いケースを両手で取り上げると、胸の前でぽんぽんとケースを叩いた。

山崎は、ぎらぎらした目で、翔子の目をしっかり捉えると、

「翔子さん、とてもラッキーですねー。　少し使い込んでいるんですが、リードとマウスピースは、おニューに取り替えてます。なのでパーフェクトな無菌状態。ストラップは、少し使い古していますが・・・、首には良く馴染むと思います。」

これには翔子も、さすがに参った。という表情で、鮫島を見た。

「翔子さん、旅の恥はかき捨て。試しに少し吹いてみたら　どうでしょう・・・気晴らしがてらに・・・。」

「えーっ。・・・あ　はい・・・、　それじゃ・・・とりあえず形だけということで・・・いいですか？」

翔子は自信なさそうに答えた。

「もちろんです・・・。」山崎は、ウインクをしながら黒いケースを翔子に差し出した。

翔子は、ケースの蓋を開けると、金色に輝くアルトサククスを見つめた。しばらくして、おもむろにそれを両手で取り上げた。

慣れた手つきでストラップの長さを調節すると、すっかり忘れかけていた指の動きを確かめるように、両手の指を動かした。　久しぶりに戻ってきた、指の感触に翔子は頬を緩めた。

翔子はしばらくの間、三人の演奏を聴いていた。

『一見おっとりして、のんびりそうに見える鮫島に、こんな一面があったのか・・・。それにマスターも福本も嬉しそうに演奏している。』　翔子はふと、サンルームに置かれた電子ピアノを思い出した。『あれは、鮫島さんが使うためだったのね。』　翔子は、そんなことを考えながら楽しそうな3人を見つめていた。

3人で数曲のリハーサルが終わると、山崎は翔子に、曲の流れを一通り説明した。その後で翔子は別室に移って一人で自分のパートを繰り返し繰り返し練習した。

3人が感心するほど、翔子は、何度も何度も吹き続けていた。たっぷり一時間を超えた頃、翔子は、また3人のところへ戻ってきた。

少し休んでから、翔子を加えてメンバー全員で、曲をひとつとおり流してみることにした。

3度目の通し演奏が終わった時、予想を超えるいい感触に山崎は、鮫島と福本を見ながら、満足そうな表情で、親指を立てた。

「じんべいさん、福ちゃん 今年は、楽しみですねー 」

鮫島も福本も、嬉しそうにうなずいた。

翔子は、ほんのりとピンク色にほてった頬に、首に巻いていたタオルを当て、少し恥じらいながら、ふーっと息を吐いた。

次の練習の打ち合わせをして、その日はお開きとなった。

「ふふふ・・・」 帰りの車の中で、翔子が突然堪こらえるように笑いだした。

「あれ どうかしましたか？・・・翔子さん。」

「どうして、鮫島さんが、じんべいさんと呼ばれているのか・・・、教えてもらったんです。マスターに・・・。」

『翔子さん 鮫と言えば シャークでしょ 鋭い牙で人間もガブッとやられればひとたまりもない。俊敏で、どう猛な・・・海のギャングですよ。でも鮫島ちゃんは、全然そんな雰囲気がないでしょー、鮫は鮫でもどこか、の〜んびりというか、おっとりしていて、動作も機敏には見えないですよー。』

そこが、沖縄の水族館とかで飼われているジンベイザメと、なんかあ、そ〜くりなんですよー。僕がそう言ったら、みんな、なるほどねと妙に納得してえー・・・、それから自然と、そう呼ぶようになったんですよー・・・』

翔子はその話を聞いて、始めて、徳兵衛が、鮫島のことを、じんべいさん。と呼んでいた意味がわかったのだ。

「ふふふ 山崎さんって 面白い方ですね・・・」

コンサートは、二日後に迫っていた。

翌日、翔子は早々に昼食の後片付けを済ますと、鮫島が診察室に入っている間、アンを連れて裏手にある丘に登った。

青い空はこの日も続き、所々に綿菓子のような白い雲がふわふわと浮いていた。

翔子は、角材で造られた テーブルの上に黒いケースを置くと、持っていたボールを遠くに放り投げた。

すると、アンは喜んで駆け出すと、ボールをくわえて戻ってきた。翔子と遊ぶアンは、嬉しそうに翔子に体をすり寄せ、勢いよくしっぽを振り続けた。

「ふふふ、お利口さんねー あなたはー さあ、アンちゃん もう一度いくわよー それーっ」

そうして、暫くの間、アンと遊んだ翔子は、おもむろに、ケースからアルトサックスを取り出した。

その澄みきった音色は、鮫島のいる診察室にも聞こえてきた。
午前中に聞こえていた音色に比べると、一層伸びのある音になっていた。

仕事の手を休め、背もたれに体を預けながら頭を両手で支え、天井を仰ぐような格好で聞き入っていた鮫島は、満足そうにうなずいた。

『これほど熱心に打ち込むとは・・・、これが翔子さんの心の強さなのかもしれないなあ・・・。』
鮫島は、感心した。
すると鮫島は、ふと思い出したように立ちあがって、診察室を出た。

一時間ほどして、診察室に戻った鮫島は、また机に向かって調べ物の続きを始めた。

鮫島が気がついた頃には、いつの間にか、アルトサックスの音が止んでいた。 鮫島は両手を広げて背筋を伸ばした。
腕時計を見ると、『よし、そろそろだな』 と独り言いながら、開いていた本を閉じて、キッチンに向かった。

冷蔵庫の中から、大ぶりのココットを取り出した鮫島は、にんまりと微笑をこぼした。

そして、ココットから黄色いかたまりを、スプーンで白いプレートに取り分けると、トレーに乗せてサンデッキに向かった。

丘の上のベンチに腰掛ける翔子が見えた。アンは翔子の側でお座りをしている。

「おーい・・・おーい・・・」 鮫島の声に気がついて、翔子が手を振った。

鮫島が手招きをすると、「はい」と言う返事が返ってきた。

翔子がサンデッキに戻って来ると同時に、鮫島が両手にコーヒを淹入れたマグカップを持って、デッキに出てきた。

「お疲れさま、いやー翔子さんの集中力には頭が下がりますねー、それに・・・いい音出てましたよっ」

テーブルの上にセットされたプレートを見て翔子は思わず表情が明るくなった。

「パンプキンプリン お好きですか？」

「はい、大好きです。」目を輝かせながら、翔子は力強く答えた。

「良かった。 カラメルを作るとき、僕は水の代わりにブラックのコーヒを使うんです。ビターに仕上がって、これが以外といけるんですよ。」

「さあ、食べましょう。 はい アンちゃんの分は、こっちだよー」

二人は、椅子に腰を下ろした。

翔子はニコニコしながら一口、口に運んだ。そして何事もなかったように、無表情のまま、さらに、もう二口、口に運んだ。

不安そうに鮫島が見つめる。

翔子は、同じようにしてもう一口、口に含むと・・・突然声を出して笑いはじめた。

「ふふふふふ ずーっと 無言で食べ続けようと思ったんですけど 美味しくて我慢できませんでした。 ふふふふふ・・・」

翔子は、悪戯っぽい表情で鮫島を見た。

「くーっ そうきたかあ・・・やられたー・・・」

「まあ アンちゃん もう食べてしまったの？ 美味しかったでしょー？」

ところが、しばらくして、マグカップを両手に持ったまま、翔子は急にまた無口になった。

「どうしました 今度は？」

翔子は、カップをテーブルに置くと、心苦しそうな表情で口を開いた。

「そうでしたか。それで出発はいつ？」

「友人の渡米が、一週間早まって、明後日の深夜０：０５分、羽田発のロス行きに乗るそうなんです。 発つ前に会って欲しいと・・・先ほど メールがありました。その時間に間に合うように行くには、遅くても明日の１９：３０発の便で羽田に向かわないといけなくて。せっかく皆さんが誘って下さったのに、コンサートには出られなくなるんです。なんだか申し訳なくて。」

「あー いやいや 翔子さん コンサートのことは気にしないで下さい。それより、自分のことを大切に考えて下さい。マスターも福ちゃんも、きっと、良く理解してくれると思います。」

申し訳ない気持ちが次第に翔子の気持ちを重くしていった。

「食べ終わったら、アンを少し散歩に連れて行ってあげていただけますか。アンも食後の散歩をしたいと思います・・・」

そう言って鮫島は翔子を散歩に送り出した。

その日の夜、鮫島の家マスターと福本の二人がふいにやって来た。

「翔子さん、じんべいさんから聞きましたよっ。 コンサートのことだったら、気にしないで下さい。それより、そっちの方が、何倍も大切なんですから。 ただ、これだけは覚えておいて欲しいなあと思っているんです。バンドのメンバーは、どこにいても家族同然ですからね。 遠くに行っても、たまに元気な様子を知らせて下さい。そしていつか、また、必ず遊びに来て下さいね。」

マスターの山崎は、穏やかな表情で翔子にそう伝え、大きな手で翔子と握手をした。山崎の横に立っていた福本も、

「翔子さん、サックスを吹く姿、カッコ良かったですよ。いつかまた一緒に演奏できるの楽しみにしていますから。」

そう言うと両手を添えて、笑顔で翔子と握手をした。

山崎と福本の心遣いに、翔子は胸が熱くなった。

翔子が、黒いケースに入ったアルトサックスを返そうとした。すると、

「ああ それは明日 じんべいさんに渡して下さい。良かったら日中それで遊んで下さい。」

山崎はそう言うと、福本と一緒に帰っていった。

二人が去った後も、二人の大きな手のぬくもりが、右の手の中に残っているように感じた。翔子はしばらくその手のひらを見つめながら、左手の指先でそっとなぞるようにして余韻を確かめた。

その夜、香織の部屋で暫く話し込んでいた翔子は、部屋に戻ると荷物の整理を済ませ、早めにベッドに入った。

翌朝、翔子は香織と鮫島のために朝食を作った。

野菜のサラダとスクランブルエッグ、フレンチトーストの簡単な朝食だったが、二人とも喜んで食べてくれた。３人で過ごす最後の食卓だった。

夕方、翔子は香織の帰りを待って、空港に向かうことにした。
空港へは、コンサートのある鮫島の代わりに、徳兵衛が送ってくれることになっていた。

翔子と、鮫島はアンとサンルームにいた。
翔子は、スピーカーから流れるＪＡＺＺを聴きながら、鮫島と話をしているうちに胸がいっぱいになりそうになった。

鮫島は、それを察すると、ぽんぽんと翔子の肩を叩いた。

「あり？ 翔子さん 何だかこれで最後って顔してますよっ。アンが寂しがりますから、また帰ってきてくださいねっ。」

鮫島は、急に悪戯っぽい表情になると翔子に尋ねた。

「えーっと、翔子さんは、この場所は・・分かりますかねー この次のために、地図でも描きましょうかぁ？」

翔子は、直ぐに鮫島の意図を察したらしく、エヘンと咳払いをすると、

「はい、大丈夫です。ここはクローバーファームの隣にあるんです。しかも、わたくし、この辺はよ〜く歩いてますから、土地勘がございますのよ・・。」

翔子は、さらりと答えると、クスクスと笑い出した。

鮫島は、少し安心したように、一緒になって笑った。

『人はいつだって いろいろなものに さよならを言わなければならない。』

鮫島は、以前雑誌で目にしたことがある、ニューヨーク生まれの作家ピーター・Ｓ・ビーグルの言葉を思い出していた。

獣医になって、鮫島は幾度となく、言葉が通じない動物たちの、悲しい目を見つめながら最期を見とる場面に立ち会って来た。

獣医としてまだ日の浅い頃、それはとても耐えられないほど辛い時間だった。言葉にできない重圧が鮫島を苦しめた。未熟な自分を幾度となく責め続けた日々があった。『自分はこの仕事に向いていないのではないか。』 真剣にそう考えた。

そんなある日、偶然手に取った雑誌に、その言葉があった。

『そこから目を背けてはいけない。どのような場面に直面しても、最善を尽くすこと。 それ

が自分のミッションなんだ。』

そういう考え方に辿り着いたとき、鮫島は、立ち直るきっかけをつかんだ。

『どこことなく妹に似た翔子には、様々な困難を乗り越えて、前向きに歩き続けて欲しい。今日は、明るく元気な姿を見ながら、背中をポンと押して、送り帰してあげたい。』

鮫島は、そう考えていた。

外にトラックが止まった。

見ると中から香織が降りてきた。どうやら、徳兵衛が送ってきてくれたようだった。

翔子と鮫島は外に出た。

翔子は、あらためて鮫島と翔子に丁寧に挨拶をしてから、アンの前にしゃがみ込んだ。

アンにお別れの挨拶をすると、キャリーバッグに巻いていたバンダナをアンの首に巻きつけた。

「アンちゃん　またね・・・。」

アンはしっぽを振りながらぺろぺろと長い舌を出して翔子に抱きついてきた。

翔子は、微笑みながら鮫島と香織に頭を下げると、徳兵衛のトラックに乗り込んだ。鮫島と香織は、トラックが見えなくなるまで手を振り続けた。

夕暮れが迫る道を、徳兵衛のトラックが走り去って行った。

その頃、翔子の友人の真鍋は、羽田空港の第2ターミナルにあるホテルにいた。

フロントと同じフロアーにあるカフェで、飛行機が良く見えるテーブル席から、外の景色をずっと眺めていた。

一機、そしてまた一機。飛行機が降りて来る。真鍋はおもむろに時計に目を移した。

ここから国際線ターミナルへは、空港内の連絡バスで移動時間は7分。バスは5分間隔でやって来る。翔子が予定どおり78便で21時過ぎに羽田に到着してから移動しても、出国手続きには十分に余裕がある。真鍋はそう考えていた。

暫くして、真鍋の携帯電話の着信を知らせるライトが点滅した。真鍋はそれが翔子からの電話であることを確認すると、嬉しそうに、携帯電話を耳に当てながら、足早にロビーに出た。

壁に、飛行機のパーツが撮されたパネルが掛けられている。そこまでやって来ると、3つ並んだ赤いシートの手前の椅子に、ゆっくりと腰を下ろした。

時折、カフェの利用客が真鍋の前を通り過ぎる。真鍋はその度に、通話口を手で覆いながら話し続けた。真鍋は普段と変わらない口調で言葉を選ぶようにして、翔子と話し続けていた。やがて、背筋をすーっと伸ばすと、真鍋の表情が穏やかになった。

真鍋は、嬉しそうに微笑むと「うん、そうだね。会えるのを楽しみにしている。ありがとう。」そう言って電話を切った。再び窓際の席に戻って来た真鍋は、テーブルの上に携帯電話を置

くと、すっかり冷めきったコーヒーを、一口で飲み干した。

外を見ると、明るいスポットライトの中で、B747のひときわ大きな機体が、ゆっくりと駐機場に入ってくるところだった。

電話が終わると、翔子はトラックに戻ってきた。徳兵衛は作業服の袖を少しまくり上げると、腕時計で時間を見た。そして、翔子と一言、二言、言葉を交わし、うなずくと、サイドブレーキを外して、アクセルを踏んだ。直ぐにトラックのエンジンが、唸り声を上げながら加速した。

遠くに見えていた交差点が、みるみるうちに近づいてきた。
信号が黄色に変わった。

徳兵衛は、素早く左右を確認すると、躊躇なく走り抜けた。そして徳兵衛は、更にアクセルを踏み込んだ。

予定より少し遅れて、コンサートは始まっていた。

Jazzを中心に構成された演奏を、楽しみにやって来る常連客も多かったが、バンドマスターの山崎のトークを楽しみにやって来る客も結構多く、コンサートは笑い声の混じる、和やかな雰囲気の中で進んでいた。

15分のインターバルの後、後半が始まり、予定していた5曲もそろそろ最後の曲を演奏するところまで来ていた。

ステージ上では、山崎が曲の紹介を始めていた。

鮫島は、次の曲の譜面を準備すると、ステージ横の壁掛け時計を見た。

午後8時を過ぎていた。『翔子さんは、今頃どの辺りを飛んでいるだろうか。』 鮫島は、ふとそんなことを考えていた。

ちょうどその頃になって、徳兵衛がコンサート会場にやって来た。

徳兵衛は、非常口から少し離れてトラックを止めると、静かにサイドブレーキを引いた。

勝手をよく知っている徳兵衛は、トラックを降りるとすぐに、非常口からそのまま中に入った。

そして、控え室と書かれた紙が、無造作に貼ってあるその部屋を通り過ぎ、演奏の始まったステージ脇のコーナーにやって来ると、そばに置いてあったパイプ椅子を静かに取り出し、ゆっくりと腰を下ろした。

徳兵衛の姿は客席からは見えない。徳兵衛の斜め前に、山崎の背中が見えている、その反対側に鮫島が座り、ピアノとキーボードが周りに配置されていた。 福本は、二人の間に立って、ベースを弾いていた。

やがて、観客の大きな拍手がホール一杯に鳴り響いた。

どこからともなく、アンコールの声が上がった。 一層拍手が強くなった。 山崎は、椅子から立ち上がると、胸に手を当てながら、深々とお辞儀をした。

そして、満足そうにニコニコしながら再び席に着くと、鮫島と、福本にアイコンタクトを送った。

その合図を待っていたように、鮫島の指先が、キーボードの上で静かに動き始めた。

♯ ♪ ~ ♪ . . . 場内は、一瞬のうちに静まりかえった。

♪♪ D'ont go changing to try and please me

♪ . . . And I donot see you any more

♪ ♪ . . .

ビリージョエルの Just the way you are ー素顔のままでー だった。

3人は、翔子と一緒に演奏はできなかったが、翔子の新たな旅立ちを祝福する気持ちを込めて、アンコールをこの曲にしようと決めていた。

そして間奏は2番の歌が終わるところで、タイミングを見て山崎がサインを出し、その合図で鮫島がキーボードのスイッチを切り替えて入れることにしていた。

3人は、それぞれの思いを胸に演奏を続けた。

美しいメロディーが、ホールを包み込む。 鮫島は、ある日突然目の前に現れ、そして風のようにすーっと旅立っていった、翔子の姿を思い浮かべながら、歌い続けた。

やがて曲は2番に入り、間もなく間奏に移る最後のパートに入った。最後のフレーズでボーカルと重なるように間奏が始まる。山崎は、そのタイミングを待っていた。

I could not love you ♪ ♪

I love you just the way you are . . . (間奏) . . .

鮫島の歌に合わせて、その時を待っていた山崎が、間奏のタイミングをアイコンタクトで送ろうとした。

しかし、鮫島はの視線は山崎に向いていない。

山崎が 『じんべいさん。どうした?』

と思ったその瞬間、山崎の背後で、アルトサックスの澄んだ音色が、ホール一杯に響きはじめた。

観客の視線が、一斉にその方向に集中した。

山崎はあっけにとられて、鮫島の顔を見た。さらにベースの福本の表情を見ると、山崎は、『やられたー』 という仕草で頭を落とした。

しかし、直ぐに苦笑いを浮かべながら、顔を上げると、ゆっくりと振り向くように音のする方向に顔を向けた。

翔子だった。

翔子は、アルトサックスを吹き続けながら、ゆっくりとドラムとベースの間にやって来た。せつなくも、艶やかで伸びのある、優しいアルトサックスの音色がホールを包み込んだ。

再び鮫島の歌が始まり、やがて、エンディングの翔子のパートが静かに終わろうとしていた。すると同時に、大きな拍手が渦巻くようにホールに沸き起こった。

波打つような歓声と拍手の中で、メンバーも立ちあがって、翔子に拍手を送った。

少し照れくさそうな表情で、翔子は深々と頭を下げた。

山崎は、あらためてメンバー全員を紹介した。惜しみない拍手の中で、静かに幕が下りてきた。

幕が下りると同時に、山崎は肩をすぼめ、両手を大きく広げながら嬉しそうに、翔子に問いかけた。

「翔子さん What happen ? 」

「マスター ごめんなさい・・・。」

翔子は、微笑みを浮かべながら、頭を下げた。

福本を見ると、ベースを抱えた福本が微笑を浮かべながら、ゆっくり親指を立てた。

翔子が、鮫島の前にやって来た。

鮫島は、静かに立ちあがると、満面の笑顔で

「お帰りっ。」 と翔子に声をかけた。

翔子は、こぼれるような笑顔で、少しはにかみながら、鮫島を見ると、首を左に少し傾けながら、

「ただいまっ」と小さな声で応えた。

その一部始終を間近に見ていた徳兵衛は、前歯の抜け落ちた口を大きく開け、皺だらけの顔をくしゃくしゃにしながら、うんうんと満足したように顔を上下させて、近寄ってきた。

その夜、翔子はなかなか眠りにつけなかった。 時計を見ると既に時刻は午前1時30分を回っていた。

『真鍋は、飛行機の中でもう眠りについただろうか・・・。』 翔子は天窓から星空を眺めながら、真鍋のことを考えていた。

長い話の後で、『お互いの夢を大事にしよう。今度また会えるのを楽しみにしている。ありがとう。』翔子の話を聞き終えた真鍋は、最後には、穏やかにそう言って電話を切った。

翔子は、真鍋の言葉を何度も心の中で繰り返した。

真鍋のその心遣いに、翔子は助けられる思いがしていた。

翔子は、山崎の勢いに押されるようにして、黒いケースを手にした。蓋を開けて、金色に光るアルトサックスが現れたとき、ずっと長い間会えなかった友人に、再び会えたような気持ちで、しばし、じっと見つめていた。

ふと我に戻って、両手でアルトサックスを取り出し、首に掛けたストラップのフックを掛けて、指の感触を確かめた。そうしているうちに、すっかり忘れていた心地よい緊張感が再び戻って

きた。

そして、何度も何度も繰り返し自分のパートを練習しているうちに、時間に追われて苦しかったけれど、夢に向かってひたすらC Aになるための試験準備に没頭した学生時代の出来事が、鮮明に蘇ってきた。

『倶楽部活動は、決して途中で投げ出さない。』 練習は厳しかったが、翔子はそういう思いで、やり抜いた。

幼い頃から思い描き続けた夢。『C Aになって、大空を飛ぶ』 そのことは、翔子にとって部活以上に、決して諦めるわけにはいかない、かけがえのない夢だった。

翔子は、自分にとっては過酷な、けれど充実していた青春の日々を思い出すにつれて、『今ここで、本当に飛行機を降りてしまって悔いは残らないのか。・・・』

翔子は、自分の中で起きようとしている心の変化に、次第に気づき始めた。

『今の仕事の中で、自分にできる役割はあるのだろうか。自分はどういう気持ちでそれに向き合えば良いのか・・・』

翔子は、自問自答を繰り返した。

『空への憧れだけではなく、会社という組織の中で経験を重ねて得たものを、次の世代に繋げていく。そういう役割もあるのかもしれない。』 ぼんやりとした輪郭がやがてははっきりと色づきはじめた時、翔子は、迷うことなく徳兵衛のトラックから降りて真鍋に電話を掛けた。

そして翔子は今、『困ったときは原点に、そして勇気を持つこと。』 あの時 ”豊かな森”で、鮫島が話していた言葉の本質に、ようやく辿り着いたように思った。

翌日の午後、3人は新千歳空港にいた。

「それじゃ翔子さん、アンはここから先には入れないので、私はここで失礼します。また、遊びに来て下さいねっ。」

「ええ、香織さん。ありがとう。 試験頑張ってるね・・・。 待っているわよ。 それじゃ、またね・・・。」

「ふふふ アンちゃん、またね。バイバイ。」

香織とアンは、駐車場からターミナルに向かう連絡通路の手前で翔子に別れを告げた。

鮫島と翔子は、ターミナルの2階にある手荷物検査場のところまでやってきた。

「ああ、良かった。少し元気が出てきたみたいで、安心して見送ることができます。」

「鮫島さん、いろいろありがとうございました。．．．．． わたし、実は鮫島さんにお願ひがあるんですが．．」

「えっ 今度はどうしました？」

翔子は、少し恥ずかしそうにしながら、口を開いた。

「私、鮫島さんのこと、．．．じんべいさんと呼んでいいですか？」

「あ～それですね．．． ははは もちろんです。」

「じんべいさんは、名医さんですねっ．．．。」 翔子が、微笑みを浮かべて鮫島に言った。

鮫島は、サングラスを外すと

「で しょうー？」 と言って、直ぐに笑いだした。

翔子も、それにつられて、笑い出した。

鮫島は、再びサングラスを掛けると、にこやかに右手を上げて翔子に声をかけた。

「Well, Shoko-san, Have a nice flight. Take care.」

翔子は、『くすっ』 と思い出し笑いをした後で、微笑を浮かべながら、鮫島を見つめた。
そして、首を少し傾げると、

「see you 」 と言って手を上げ、検査場の中に入っていった。

ゲートを通過した翔子は、鮫島の方を振り向いて、にこやかに右手を小さく振ると、検査場の奥に姿を消した。

－ 数ヶ月後 －

翔子の携帯電話から着信音が流れた。

「翔子さん、突然のメールお許し下さい。なかなか言い出せなかったのです。
．．．．．実は．．．．．子供が、できまして．．．。」

唐突なメールは、鮫島からだった。

翔子は、小首を傾げた。

『えっ 一体 どういうこと？・・・子供って？・・・』 次第に翔子の表情が硬くなる。

翔子は、画面をスクロールした。

写真が添付されていた。 一瞬翔子の目が止まった。

「まあー アンちゃん ママになったのねー」

翔子は、目を細めて写真を見つめた。

写真には、アンの側に6匹の子犬が写っていた。真剣な表情で正面を見ている子。隣の子の上に乗るかかっている子。その下でじっと辛抱している子。カメラの方に歩いてくる子。何事もないようにマイペースで足を出してすやすやと寝ている子。アンに甘えて寄りかかっている子。

そして、アンの子供達の首には、あの日、翔子がアンに巻いたバンダナに似た色合いのバンダナが同じように巻かれていた。

翔子は、さらに画面をスクロールした。すると鮫島からのメッセージがさらに続いていた。

「アンは子育てに、奮闘中です。」

『くーっ そうきましたね じんべい・・・ さん ・・・。』

(#♪ エンディング)

暫くして、タイマーが鳴った。

翔子の表情が、にわかに変わった。

翔子は、携帯電話を閉じ、椅子から立ちあがって、ハンガーに掛けてあった制服の袖に腕を通すと、制服の裾を両手ですっと軽く下に引いた。

鏡の中に、凜々しい翔子の制服姿がそこにあった。

そして、翔子はその鏡の前で素早く身の回りを確認すると、集合場所のロビーに向かった。

翔子が姿を見せると、明るい挨拶を交わす声が、ロビーに響いた。

翔子は、少し緊張した表情の訓練生を気遣いながら、クルーと移動のマイクロバスに乗り込んだ。

マイクロバスは、南国の樹木が茂るエントランスを静かに離れると、空港に向かって走り出した。

道路に沿って走るモノレールが、空港に向かって走って行く。

轟音とともに戦闘機が、南の空を急速度で駆け上って行く。

翔子は、再び訓練生の後ろ姿に目を移した。

『この訓練生にも、きっと素敵な出会いが待っているはず・・・。

嬉しいことも、辛いことも、沢山経験して、大きく羽ばたいてね。

Have a nice flight. 』

翔子は、心の中でそっとささやいた。





photo // 2012.8 HND AP

music// Just The Way You Are // Billy Joel

// (♯♪ エンディング) Someday My Prince Will Come～いつか王子様が // yamagen 山弦

エンディングのマークのところで、この曲をかけて聴きながらラストシーンを読んでみて下さい。

まるで映画のように、この小さな物語のラストシーンが見えてきませんか。

2012.6.26 82便 機内で出会ったC Aさんの素敵な笑顔をモチーフに書き下ろした小さな物語。

素顔のままで

<http://p.booklog.jp/book/58894>

著者：円山 愛祐

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/amaruyaman3w6/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58894>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58894>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ